

【書評】

## 奥田知志，原田正樹 編 『伴走型支援—新しい支援と社会のカタチ—』

(有斐閣，2021年，A5判，208頁，2,000円+税)

川島 ゆり子  
(日本福祉大学)

伴走型支援という考え方は、ソーシャルワークの実践や理念の中で今までも大切にされてきた。本人主体の原則に基づき、支援者はあくまでも伴走者であって指導者ではない。本人の人生の歩みに寄り添いながら本人が自分自身の人生の主演であることを支えるために、その状況に応じて、ソーシャルサポートネットワークを組み替えながら伴走していく。

ソーシャルワークとしてまさに根源的な理念としての伴走型支援が、近年我が国の政策的用語としてクローズアップされてきた経緯がある。本書の中で原田が解説しているように、「地域共生社会推進検討会」の最終とりまとめ(2019)において、今後求められる対人支援は「具体的な課題解決を目指すアプローチ」と「つながり続けることを目指すアプローチ」が車軸の両輪として求められるとされ、伴走型支援はこの2つのアプローチの共通の基盤として示された。

この2つのアプローチを示す概念図には、2人の人が左右に描かれ、人の大きさと同じぐらいの「いかにも重そうな」歯車が描かれ、それを人が踏ん張りながら回しているイメージが示された。しかも、この相談支援のあり方には「断らない」という枕詞が付記されている。この図を見ながら、現場のソーシャルワーカーが「これは大変そうだな。これをやれということなのか」とため息混じりでつぶやいていたことが今も思い出される。

伴走型支援とは一体何なのか。誰がするのか。

断らないということは、どんな状況になっても逃げるな、踏ん張れということなのか。このような戸惑いが今も現場で払拭されているわけではない。

一方、制度化が進み包括的支援体制を整備することが地方自治体の義務として規定され、国の補助事業である重層的支援体制整備事業も少しずつではあるが、広がりを見せ始めている。事業化されることにより、伴走型支援の理念が矮小化されることがないように、何のために何を指してこの支援のあり方が今求められているのかということに答える意味でも、本書が2021年に刊行されたことには大きな意味があると感じている。

本書の構成は3部構成になっている。第1部は伴走型支援の理念が示され、伴走型支援が求められる社会的背景が説明される。

奥田知志(1章)は伴走型支援とは「解決」という結果ではなく、「つながり」という「状態」を重視する。「生きて繋がること」に最大の価値を見出すとし、「問題解決型支援」と「伴走型支援」は支援の両輪として実施されるべきであると提起する(奥田2021: 11)。2019年の厚労省の概念図では2つのアプローチの共通基盤としての「伴走する意識」として伴走というワードが使用されていたが、本書では「つながり続けることを目指すアプローチ」=「伴走型支援」と定義しているということになる。この点は、後述するが若干の注意が必要となる。

稲月正 (2章) は、伴走型支援の必要性の理由について、つながり続けることによって生活困窮の当事者自身が自らの状態や存在意義を知り、「助けて」と言えるようになるからであるとする (稲月 2021: 29)。自分を大切に思ってくれる他者、自分が大切に思う他者とのつながりが生への意欲を生み出すとし、「助けて」と言えるためには、そうした生への意欲を生み出す他者とのつながりが必要であるとしている。

藤森克彦 (3章) は、つながりの欠如の社会的実態をデータを用いながら示す。また伴走型支援の目的は伴走することそれ自体にあるとしつつ、支援を受けない状態をゴールとするのではなく、支援を受けたものが支援をする側に変わるなど、互酬的関係になっていくことを目指すとしている (藤森 2021: 47)。

第1部の共通項として、社会的孤立の広がり支援につながらないケースの背景にあるということが示され、本人が自分自身の人生の主演として自律 (autonomy) するには、他者の存在が必須であり、伴走型支援は他者と「つながる」ということそのものが目的であるということが主張されている。

第2部は、3名の実践者がそれぞれ伴走型支援のあり方について、自身の実践経験に基づいて論述している。この3名の実践者は地域共生社会の実現に向けた厚生労働省の審議会のメンバーでもあり、伴走型支援のトップランナーとして全国的に知られている存在である。

勝部麗子 (4章) は、伴走型支援とは住民や当事者とのつながりを通じて本人に出会い、本人の課題を知ることを通じて本人を支える人を増やしていくことであるとする。そのためにも本人を取り巻く地域の側にも偏見や誤解を取り除いていく働きかけが必要であるとし、伴走型支援の対個人の支援と対社会の支援の連動の重要性を指摘している。

谷口仁史 (5章) は、声なき SOS を受け止める伴走型支援におけるアウトリーチの必要性を提起し、アウトリーチに際しての徹底的な準備のプロセスについて詳細に解説をする。支援が必要な

状況だと周囲が判断していても、本人が支援を受け入れる状況ではない場合も多い。谷口が示す「社会参加まで責任を持って見届ける伴走型支援」のプロセスは、支援の膨大な蓄積の中で紡ぎ出された経験値に基づいていることが伝わる。まさに徹底的な本人理解に基づき、本人が生きることへの意欲を再び取り戻し人生の主体となっていくことを支える伴走型支援のあり方が示されており、多くの実践者の指針となると感じられる。

大原裕介 (6章) は、伴走型支援を一部の支援者で抱え込むのではなく、伴走型支援をリレーに例えながらタスキをつなぐ相手が多ければ多いほど、長く伴走することができるという提起をする。大原の論考の興味深いところは、本人に対する共通した思いや本人に対する様々なケースヒストリーを、タスキを一緒につなぎたい相手には当然語るが、そこに伴走者として加わることが情緒的な動機付けだと続かないということを明快に指摘している点である。タスキに何の意味があるのか、当事者と伴走していくことにどのような価値があるのか、伴走者にとっての意味がしっかりと打ちだされていないとタスキはつながらない (大原 2021: 98) とする。この点は、伴走型支援に関わる支援者がつい陥りがちな点が指摘されているように感じる。長い間ケースに寄り添い、本人の辛い経験の積み重ねを聞き続けている支援者は、ともすると本人の思いに巻き込まれ情緒的に周囲に訴え、理解を示さない相手に対して「優しさが欠如している」と非難する傾向になるかも知れない。

伴走型支援が他領域や地域住民にタスキをつなぐという支援の広がりを重視するのであればこのように「伴走する人を伴走する」マネジメント視点も必要であるということが提起されている。

この3者の論考の後原田によるまとめがあり、伴走型支援は対個人としてはジェネラリストソーシャルワークを志向しているとしながら、対社会への支援がジェネラリストソーシャルワークでは議論が不足すると指摘する。社会変革を意識し地域福祉の基盤づくりの必要性を提起する論考は勝部の論考と共通する。

第2部の共通項として、まずは本人との関係性、さらに地域・他領域の専門職・事業所など多様な主体にタスキをつなぐ実践のあり方が示された。伴走型支援が支援者の抱え込み・バーンアウトにつながらないためにも、トップランナーに学びながらも、実践の普遍化を目指す必要がある。

第3部は、第1部伴走型支援の理念と背景第2部伴走型支援の実際に続き、「新しい社会を構想する」と題して、これからの伴走型支援のあり方を模索する論考が示される。

向谷地生良(7章)は、伴走型支援の支援者は誰なのかという問い直しを私たちに提起する。向谷地は伴走型支援の専門性については、誰かが独占したり占有すべきものではなく、誰しもがその人固有の人生の「経験専門家」なのだとする。そして伴走型支援とは、当事者と支援者がともに暮らし方を模索するプロセスであり、生活実践であるとしている。

ここで読者には「揺らぎ」が生じる。1部2部において、伴走型支援を必要とする人々が同定され、専門職としての実践が紹介され、2部の終わりにおいて、対個人としての伴走型支援はジェネラリストソーシャルワークを志向していると示されてきた。専門職としての実践としての伴走型支援が示され、タスキをつないでいくということも専門職のマネジメント視点による実践であると読み取ってきた。しかし、向谷地からは、当事者の暮らしの中に身を置きながら寄り添う”公私混同型”の実践スタイルとしての伴走型支援のあり方が示される。ここで改めて浮かぶ疑問は「伴走型支援の支援者は一体誰なのか」ということである。

野澤和弘(8章)はさらに揺らぎの振幅を増大する。この章のタイトルは「伴走型支援は本当に有効か」である。伴走型支援が議論の余地なく、社会的に孤立し困窮状態にある人にとって良きものであるとする流れに対して「本当にそうなのか」と問いかける。孤立や困窮の中にいる状態の人は、周囲の人の考えに依存しながら判断している場面が多く、「伴走型支援」の支援者はどこまでそうした関係性を自覚しているのか疑問を呈

し、伴走型支援がパートナーリズムに陥りやすい危険性に警告を発する。

村木厚子(9章)は改めて伴走型支援にはまだ確定的な定義があるわけではなく、これからみんなで創りあげていくものであるとし、多くの人が「私が考える伴走型支援とは・・・」と語ることで、この概念と実践は豊かなものになっていくと指摘する。その上で、伴走型支援を展開していくには、行政、企業、NPO/NGO、そして市民の協働が求められるとする。

最後に奥田知志(10章)において、伴走型支援が改めて論じられる。1章でも触れられているように、問題解決型の支援のみでは簡単に解決することができないケースが増大しており支援者のバーンアウトを招く。だからこそ、オルタナティブな(もう1つ別の)支援論として伴走型支援が必要であり、問題解決型とこの伴走型を「支援の両輪」とするとき「断らない」が成立するとし、伴走型支援の意義を確認している。

以上が本書の概要となるが、この本を読んだ読者の中で、総論としての伴走型支援の必要性や意義について異論を唱えるものは少ないのではないだろうか。支援の届かない人、社会的孤立の状況に陥り支援を自ら求めようとしない人の増大は統計的に見ても明らかであり、実践の場の日々の肌感覚でも感じるところであろう。

しかし、各論として以下の課題を払拭することができていないのではないかと感じている。まず1点目、伴走型支援の伴走の主体は誰なのかという問題である。地域共生社会推進検討会において提起された2つのアプローチは、専門職の対人支援のあり方について示されたものである。伴走型支援が志向する理論として本書で示されたジェネラリストソーシャルワークもソーシャルワーク専門職の実践理論である。しかしながら、当事者、相談支援専門職、多領域専門職、行政、第3セクター、地域とのつながりとタスキを誰が受けるのかが本書を通して明確な答えは得られなかったように感じる。「多様で良い」ということも1つの答えなのかもしれないが、実際に包括的支援体制の構築が推進され、事業化が進められようと

している現在、ある意味実践現場に託される形で良いのかという疑問が生じる。大原が指摘するように、伴走が制度になってしまったら、寄り添うと言いつつもあきらめさせるための伴走になっていく可能性も考えられるのではないだろうか。また、長期に関わるのは地域だからと地域への丸投げも懸念される。

もう1点は、伴走型支援が問題解決型の支援のオルタナティブなのかという疑問である。言い方を変えれば、問題解決は伴走しないのかという問いでもある。ソーシャルワークはその問題解決の過程において常に本人とともに歩み、本人の状況を写すミラー（鏡）として、本人が問題解決の主体となるようにその主体性を喚起してきたのではないか。伴走型支援は、車軸の両輪ではなく、全ての実践の基盤ではないのだろうか。

それをあえてオルタナティブとして新たな支援のあり方として設定するということは、社会的孤立は解決すべき問題としては捉えないということなのか、という問いも生じることになる。また、この伴走型支援（つながり続ける支援）を事業化することによって、つながり続けるとしながらも期限を設定したり、ある程度専門職が関わった後に、地域にバトンを投げる（渡すではなく）事象

も起こりうるのではないか。

このような問いが実践現場から提起されるということを想定した時に、今後本書の著者陣に期待したいこととして伴走型支援の主体のバトンの受け渡しプロセスを事例に基づきながら可視化し、「あの人だからできる」に終わらせないような人材育成方法の創出が望まれる。本書において谷口がアウトリーチに限定しているものの、丁寧に実践から紐解くプロセスを可視化している作業は意義が大きいと考えられる。

また、伴走型支援と問題解決型支援の違いだけではなく、その重なる議論が活性化することも今後期待したい。評者自身はこの2つのアプローチは両輪ではなく重層関係にあるのではないかと感じている。この点の議論も深める必要がある。

いずれにしても、村木が述べるように伴走型支援は固定された支援方法ではなく、これから多様な主体が協働しともに創りあげていく途上にある。しかし、制度化された今だからこそ、「伴走型支援とは何か」ということについては「そのうち」ではなく、喫緊に議論を展開する必要性に迫られていると感じる。本書を1人でも多くの読者が手に取り、この議論への参加を期待したい。